

「今こそ愛」

ヨハネの手紙第一 4 : 7 - 1 2

December.24.2023

ヨハネの手紙第一 4 : 7 - 1 2 (パウロ)

Preface

2023年が終わろうとしています、去年から今年にかけて、世界を巻き込んで終わることを知らないかのような大きな二つの戦争が起こりました。

直ぐに終わって欲しい、直ぐに終わるだろうと思われた始めに起こった戦争はいつ終わるのかも見えず、そうこうしているうちに、世界の注目を浴びるような二つ目の戦争が起こりました。

当初は、この二つ目の戦争も直ぐに終わるだろう、直ぐに終わって欲しいと思われましたが終わりが見えず、現実味を帯びて、第三次世界大戦のウォーミングアップだとか、新しい戦前だとかいう言葉まで聞こえてくるようになってきました。

主イエス様の生誕地であるイスラエルのベツレヘムでは、今年のクリスマス祝祭、すべてのクリスマス行事を戦争のため中止にするという決定までなされました。

多くの犠牲者や悲しみに沈んでいる人たちが沢山いて、一日も早く終わらせなければならぬと報道されている一方で、せつかく起こった戦争がそう簡単に易々と終わってしまっただけでは困るという人たちが意外にも少なくないということは、公然と知らされることはあまりありません。

意外にもそのような人たちの中には、大きな権力や社会情勢をも左右する程の富という力を持っていて、その富というすべてのものに優先してしまう程のスーパーパワー・大義名分の前に人々を納得させ、屈服させ、「まあ、致し方ないことだ」と思わせてしまうようなことになっていることは、表立って知らされることはあまりないようです。

戦争という世界を巻き込む大きなビジネスに、沢山の人が知ってか知らずか関わらされていることは、日々の糧を得ることに直接、または間接的に影響を及ぼしかねない事項であるがために、秘密ごとを知らされるかのように知っていく程度。

日本においてももう既に、表立って堂々と、「これは武器です」という形ではない武器のようなものは輸出されているけれども、もっと表立って堂々と、『これは、メイドインジャパンのとても性能の良い武器です』と宣伝しながら売れるようになりたい、「この一獲千金のビジネスチャンスを逃すのはあまりにも勿体ない」、「自由に武器を作って輸出出来るようになれば、また昔のような好景氣が望める」というような思いをしれどと実現しようとする気運が高まっているとも言えなくもない。

こんな世界情勢を生きている私たちにとって、また、そのような世界にあって、今読みましたヨハネの手紙第一の御言葉、「互いに愛し合いなさい、互いに愛し合ひましょう、神は愛だからです、互いに愛し合うなら神の愛が私たちのうちに全うされるのです」という言葉は、どのように聞こえるでしょうか。

「まだ、そんなこと言っているの?」、「まだ、そんなものが通じると思っっているの?」、「そんなことに何の力があるの?」、「それは膨大な利益を生み出すことが出来るの?」、「愛し合いなさいという言葉に、行いに、どれだけの力があり、どれだけの解決があり、どれだけの影響力があり、どれだけ戦争を辞めさせることに繋がるの?」というような思いが出て来てしまうような言葉でしょうか。

Part One

それでも聖書は、一貫して「愛だ」と語ります。

「愛を失ったからこそその戦争であり、憎しみであり、戦いである」と語ります。

「神が愛であることを忘れてしまったから、神が愛であられることを知ろうとしないから、神が愛であられることを認めようとしなから、その神の愛を誰もが受けていることが見えていないから孤独で空しくおじまどい、悲しみに陥り、その悲しみを人と戦うことをもって紛らわせようとしてしまっているのが、神を失った人間の姿だ」と語ります。

そして、「愛こそ最後まで残るものであり、愛こそ答えであり、愛こそ解決であり、愛こそ神の本質であり、愛こそイエス・キリストだ」と語ります。

ナチスドイツによって殉教したボンヘッファー牧師が、「キリストなしに愛を持つことが出来ると主張することは、水源のない川の流れのようなものだ」と言いましたが、イエス・キリストというお方なしには、愛はくたびれ、廃れ、枯渇し、やがて無くなり、戦いを真に放棄しようという気持ちは生まれて来ることがないというのは、私たちの生々しい日々の暮らしにおいても、人類の歴史においても、既に証明されていることだと思えます。

ヨハネの手紙第一 4 : 9、10 をもう一度見てみます。

ヨハネの手紙第一 4 : 9 - 10 (パウロ)

ここに愛があるのです。

「この小さな日本の、小さな茨城県の、小さな土浦市の、小さな土浦めぐみ教会の、小さな礼拝に出席している、小さな私一人が、このイエス・キリストというお方の愛に生きようと、愛しようと、愛し合おうとしたところで、そんな小さなことが何になるのだろうか? 何の影響を及ぼすことが出来るのだろうか?」というような疑念が、もしかすると湧いてくるかもしれませんが、主イエス様がどんなお姿でこの地上に来られたのかということを見つすぐに見るならば、その思いは変わって来ることでしょう。

主イエス様は、何の力もない赤ん坊、お父さんお母さんの助けなしでは何にも

出来ない赤ん坊という姿でお生まれになりました。

神の御姿、目に見えない神のかたちなるお方、神であられるお方が、力とは無縁の姿をまっとうしてお生まれになりました。

ここに遠大で膨大なメッセージがあります。

意外にも、神というお方は力に寄り頼まないお方であり、力とは無縁のお方であり、力を放棄したお方であるというのが、イエス様のお生まれなさった姿に良く表れております。

そればかりか、主イエス様が十字架に架けられた姿も、力とはかけ離れたお姿です。

「お前が本当に神ならば、神の子ならば、天の軍勢という力の極みのような軍隊を派遣させ、その悲惨な十字架から脱し下りて来てみろ！」というサタンの誘惑にも、人々の悪意の籠った野次にも応えることもなく、ローマ帝国という人の誇る力の象徴の前に、イエス様は何もなさりませんでした。

なぜか？

力に力をもって応答することには、何の解決もなく、根本的な解決どころか、結局また、新たな反発する力を生み出すというサタンを喜ばすだけのサイクルしか生み出さないということに、誰よりも痛みをもって知っておられたからでしょう。

さらには、神を忘れ、神を知らず、まことの神を認めようとしめない人類がやって来たこと、そのやって来たことによって人類が傷ついて来たこと、それこそが、「力を誇り、力を蓄えることであつたんだ」ということを公然とお示しになるためだったと思うのです。

「力を誇り、力を蓄えることの何が悪いんだ」と、私たち世間一般的には思ってしまうかもしれませんが、イエス様は、「受けるより与える方が幸いです」と仰ったことがあります。受ける」とは「貯める」「蓄える」、「いざって言う時に、自分を自分の力で守るために力を貯めて置くこと」とも言い換えることが出来るでしょう。

もちろん、神から与えられた物や人を大切に思い、扱い、用いることは当然大切なことでもありますし、その受けたものを恵みとして生きるために蓄えたり、貯めたりすることは十分にしてもいいことですよね。

エジプトの首相となったヨセフが、神さまから示された預言の言葉に従って、将来のために穀物を蓄え、時に適って人々に分け与えたように、神の目を意識し、神に視線を向けた恵みの蓄えというのは十分にあって然るべきでしょう。

大事なものは、そこに、神さまの恵みという意識があるのかないのか、与えられたすべてのものは神の恵みであるという主なる神様の主権を最優先にした、またはしたいと思っているのかいないのか、神が喜ばれることが私の喜びでありたいと願っているのかいないのかという神への信頼、神との関係、神との交わり

があるのかどうかということですね。

人は本来、神との交わりの中で生きることによって真に生きることの出来る存在でありますから、神を無視し、神の眼差しを意識せずに、神を恐れない生き方をしますと、言いようもない不安と恐れに駆られ、それを払拭しようと力を蓄えることに執着をするようになってしまうようです。

そしてもし、納得のいく力を蓄えられないとなるとまた恐れに駆られ、もし一定の力を蓄えられたとしても、その蓄えた力が無くなってしまふかもしれないという不安に駆られまたさらに力を蓄えようと執着してしまい、結果的に、イエス様の仰る「与える」、「分かち合う」というところに至らなくなってしまうのでしよう。

この世の中は、神の恵みゆえに、とても豊かで富んでいます。

富んでいない世界ではありません。

ありとあらゆる面で豊かに富んでいる世界ですね。

でも、不安や恐れからか、その富をある一定のところだけに留まらせてしまっていることが問題であり、その留まらせていることを出来れば長く、大きく持続させ、また出来れば、その富の中に我が身を置けるようになることを成功とか勝利とかという言葉で表現しながら戦っているのが、神の眼差しを意識しようとしないうこの世の中の営みなのかもしれません。

この神の与えしありとあらゆる富や力を、神の眼差しを意識しないことによって滞らせてしまう悪について警鐘を鳴らしているのが、旧約聖書レビ25章に記されているヨベルの年の制定ですね。(ヨベルの年については、今度またいつかお話出来ればと思います)

力を蓄えることに執着すると結局破壊を生むことを、個人レベルでも、国家レベルでも、世界レベルでも、歴史という観点からも経験して来たはずなのに、それでもまたやっぱり力を蓄えることに答えがあると、力を蓄えれば安泰だと、力を蓄えることに勝利があると、力を蓄えることこそ利益であり、富であり、善であり、知恵であり、技術であり、正義であると、何はともあれ力を蓄えるためにするんだと言えれば大概の事がまかり通ってしまうような原理の下、その力をもって制圧し、拡大し、マウントを取ることをばかりをしてきてしまった。

その最たる結果が、無力でお生まれなさった主イエス様の御降誕を祝うはずのクリスマスを、その生まれた地ベツレヘムにおいて祝うことも出来ないような戦争を優先し辞めることもない姿に、私たち現代を生きる人間の姿が良く表れているのではないのでしょうか。

Part Two

イエス様は、そのお生まれになった姿そのものを通して私たちに、力の放棄こそが、私たちの根本的な課題であり、問題であり、解決であると教えて下さって

いるように感じるのです。

「いやいや、私にはそんな大した力はありませんよ」と、大概の人は思うのかもかもしれませんが、悲しいかな人は、どんな人と対面し、関係を持つにあたって、主導権争いを無意識のうちにしてしまいます。

「この人に自分がマウント取るのか取られるのか、取られるとしたら、なるべく自分のプライドが傷つかないように取られたいし、マウントを取れるとなったら、それとなく最大限に自分の力を示しておきたい」と思ってしまうのが、私たち罪人・人間ではないでしょうか。

罪を犯した最初の人間アダムは、愛していたはずの妻エバを、力をもって無意識のうちに制圧しようとしていました。

アダムとエバから生まれきた最初の子カインは、弟アベルが気に食わないと、力をもって弟アベルを殺めてしまいました。

それからの人類の歩みの展開が聖書にずっと記されていますが、その歩みをひと一言で表現するならば、力比べです。

誰が富んでいるのか、誰が強い武器を持っているのか、誰がより良い音を奏でることが出来るのか、誰がより良いものを作ることが出来るのか、誰が大きいのか、誰が強いのかを示そうとする戦いと競争に明け暮れて行き、遂には、創世記6章の表現によりますと、「地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみないつも悪に傾き、神の前に墮落し、地は暴虐で満ちていた」というところにまで至ってしまいました。

でもそんな私たちに、そんな私たちの作った世界に、赤子でお生まれなされたイエス様が身をもって教えて下さるのは、力の放棄です。

私のやって来たこと、私の功績、私の資格、私の経歴、私の知識、私の苦勞、私の富、私の正しさ、私の鋭さ、私が積み重ねてきた経験、そして、私の力。

そこにあるのは、いつも「私」です。

結局のところ、力を放棄するとは、神の前にあって「私」を放棄するということでもあるでしょう。

私を放棄し、神に依り頼む。

私への愛から、神への愛。

私への執着から、神への信頼。

私への恐れから、神への平安。

私を喜ばせることから、神に喜んで頂く。

すると結果的に、人への愛が生まれ、自分への愛が生まれて来る。

神の前に無力であることを認め、神の前に無力である自分を吐露するならば、その無力さが、何ものをも神以外に恐れるものは無いという圧倒的な力に入れられている気付き、平安へと繋がる。

使徒パウロ先生の「弱い時にこそ、私は強いのです」という告白が私のものとなり、間違っただけを間違っていると真っ直ぐに指摘をして、力を誇る権力者によって首を切られて殉教したバプテスマのヨハネの強さが私の強さにもなり得、そしてやがてイエス様から、「愛する我が忠実な僕よ、友よ、我が命そのものよ」と言って頂く祝福に与る者となる。

私の小さな愛し合うという行い、目的、信仰が小さなもので終わることはなく、イエス様がそうであったように、無力でお生まれなされ、無力に十字架で死なれたその生き様を通して、この2000年間数多の人々をお救いになられたような祝福へと導かれて行くことでしょう。

そして、この満たしと祝福が揺るがない神の約束であるという証拠が、赤子でお生まれなされたイエス様にこれでもかと表れております。

Part Four

イエス様が私たちのためにお生まれなされた聖書は語りますが、ではそのイエス様に、神様はご自身の一部のみをお表しになったのか、それとも、神ご自身の全部をお表しになったのか？

言葉を変えますと、神さまは私たちにご自分の一部のみをお与えになったのか、それともご自身のすべてをお与えになったのか、一部か、全部か、どちらなのかを私たちははっきりと知っておく必要があります。

詩篇139：1－16（パワポ）

主なる神様は、私たち一人一人のことをすべて明確に、緻密に、細胞一つ一つに至るまでご存じであられ、しかも詩篇121篇によりますと、主なる神様は、一切まどろむこともなく、眠ることもなく、ただひたすらに私たち一人一人にその全関心を向け、視線を向け、一挙手一投足視線を離すことなく見守っておられるお方だと言います。

神さまは、私たちのように時間の一部を使って神の前に行くようなお方ではなく、すべての時間を永遠に私たちのために使っておられます。

私たちが何を考え、何を話し、何をどんな風に決めるのかをずっと見守っておられます。

そして、その御守りが形をもって表れなされたのが、主イエス・キリストの誕生だと言うのです。

すべてを私たちに差し出された神の素っ裸な御姿が、赤子としてお生まれなされたイエス・キリストです。

主なる神様は、創造主なる父なる神様は、私たちにご自身のすべてをお与えくださいました。

ならば、それ以上、何が私たちに必要でしょうか？

もちろん、必要なもの、いっぱいあるでしょう。

でも、そのどれ一つとっても、主イエスを超えるような価値のあるものは存在しません。

ミカ書6：3－8（パワポ）

「あなたの神とともに歩むことではないか。」

「わたしはあなたを助け出したではないか。この世からあなたを救い出したではないか。いのちを与えたではないか。

わたしがわたしのすべてを差し出して、わたしはあなたにわたしのすべてを与えたではないか。

そのことをちょっと考えてみてはくれないか」と、神さまが私たちに遡られながら、涙ながらに私たちに問うておられるようにお感じにならないでしょうか。

ならば、一度考えてみなければならぬと思うのです。

この神の言葉に合うように生きているのかどうかをですね。

Part Five

12月3日アドベント第1週の礼拝で、楚英先生が、イザヤ書7章からユダの王アハズに主なる神様が一つのしるしを下されたことについてお話しして下さいました。

戦争をしなければならない、戦争をすることを周りから求められている逼迫した状況の中でアハズ王は、神さまから、「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ」という不思議なしるしを与えられました。

今アハズが欲しいのは、最新鋭の武器、よく訓練された軍隊、そして敵国を圧倒的に制圧する勝利でした。

でも神さまが、そんなアハズに問われたことは、もっと根本的なことでした。

「あなたがたは、わたしが王の王であり、主の主であり、唯一の神、天地万物の創造者であるわたしを差し置いて、周りの国々と同じように戦争が立派に出来るように人の王を立てて欲しいと願い、実際に立て、ここまであなたがたの国家を持続させてきたけれども、結局どうなったのか？」

神を捨て、神を忘れ、神を知ろうとせず、力に頼り、力に依り頼み、力を蓄えることに依存した国家、社会、人間模様を作ってきた今、あなたがたはどういう状況に陥っているのか？

結局、力がないと嘆き、力がないことに不安を覚え、恐れに駆られる世の中と何の変りもない姿に成り果てたのではないのか？

わたしの前に遡り、わたしに依り頼み、わたしの前に自らの貧しさを認め、非力と認め、罪深さを認め、愛のなさを認め、わたしの愛を覚え、わたしの愛を信じ、わたしの愛によって愛し合うことの真実さを捨て去った結果ではないのか？

か？

そんなあなたがたにわたしが求めるのは、インマヌエル、『わたしがあなたがたとともにいる』ということをはっきりと忘れないことだ。

そして、赤子として生まれて来る救い主の、無力だけれどもそのすべてを神に信頼し、依り頼み、守られているという姿に倣い、その救い主の平安に今一度立ち返ることだ。

あなたの全権をわたしに委ね、力に頼まず、武器に頼まず、富に頼まず、神であるわたしとともに生きる生き方そのものを選び取って行かないか。

生き方を変えてみないか」と、アハズは問われました。

私たちにも同じことが、同じように、このクリスマスの時間問われているのではないのでしょうか。

Conclusion

私たちには、神の恵みが十分に注がれております。

辛い、苦しい、厳しい、痛い。

それでも、神の恵みは十分にあったと思いますし、もし十分じゃないと思うならば、これから、「十分にあり」と告白できるところまで、神さま必ずや導いて下さるはずです。

だから、愛し合いましょう。

愛し合うことを諦めることなく、依り頼むべき恵みに、依り頼むべきお方に依り頼みたいと思うのです。

お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの手紙第一 4：9